



新生兵庫友の会

発行: 新生兵庫友の会
〒650-0023
神戸市中央区栄町通
4-2-18 キンキビルデ
ィング5階
TEL:(078)362-1700
FAX:(078)362-1706

きずな No. 64

平成19年7月25日(水)

ホームページ <http://www.idotoshi.net> Eメール ido@idotoshi.net

音楽の力で森をつくる

プレゼント・ツリー・ライブ

(明石市) 井尻 喜三郎

去る5月20日奈良の名刹・薬師寺を舞台に渡辺美里や河村隆一ら4人の歌声が響くプレゼント・ツリー・ライブが大講堂前の特設舞台で開かれた。本尊の開眼1310年を記念し、来場者の数だけ植樹をして環境貢献をしようという今日的テーマを掲げた素晴らしいイベントであった。

当日の開演は午後6時であったが、同寺を訪れてからかなり月日が経過していたので4時頃到着し、先ず金堂に向かった。金堂には中央に薬師如来座像、左右の脇侍に日光、月光菩薩が安置されている。薬師如来像の端正な長い面相、眉の下に切れ長の目が半眼に開かれ、その目差しは千数百年にわたる世の移ろいを見つめ、人間と未来永劫をじっと見すえていた。

前日まで異常気象とかで暖かかったが、当日は一転寒気におおわれ、奈良盆地は靈気にすっぽりと包まれているようであった。私はその靈気を両手で抱き寄せ合掌。合わせた掌の中には宇宙と自分が一つになって溶けこんだ。礼拝を終え東塔、西塔等境内の堂宇をまわり本日のライブ会場である大講堂前で開演を待った。

大講堂に祀られている弥勒三尊像の金色の光背や金色の須弥壇、たちこめる香煙、かすかにゆれる燈明の焰が赤・青・ダイダイのライトを浴び幽玄の世界を演出していた。耳をつんざくようなギターの音や内蔵を圧迫するような太くて低いベースの音。こんな雰囲気の中でライブは始まった。

当日のアーティストは河村隆一さん、彼の裏声などこの場に合うのであろうかと思っていたが、そんな心配は全く無用であった。曲目は「アイ・ラブ・ユー」とか「夏に降る雪」等10数曲、歌い始めると2千5百人の来場者は一斉に総立ちして両腕を上挙げてリズムに合わせて手をたたき、腕を上と前

に大きく振っていた。私も皆と一緒に大いにはしゃいでいることに気がついた。80歳を少々過ぎた女性も私の前の席で皆とともに喜び、感動していた。河村隆一氏は「自分自身はずっと西洋のロックにあこがれて音楽を続けてきた。」と語っているが、当日はなぜかポップス歌謡調(こんなジャンルがあるのか知らないが)のものが多く、そんな関係もあったのか来場者の主力は30代、40代の女性であった。

ほんとうに久しぶりのライブであった。6月には日光東照宮で東儀秀樹さんと加藤登紀子さんのライブがある。私が興味を示せるのはこの種のものであるが、又の機会に行くこととした。

薬師寺を去るにあたって再度同寺の伽藍を見上げた。昭和51年に金堂が再建され以後西塔、中門、回廊等次々に再建され、平成15年には大講堂が再建されて今日の姿となった。この白鳳伽藍再興の原動力となったものは一体何であったのであろうか。それは同伽藍の再興に情熱を燃やし続けた、先々代の高田好胤管主をはじめとする関係者のあくなき執念と、写経勸進一文字一文字に思いをこめて又無心に写経をした多くの人たちの執念であった。

そして今回のイベントに来場した人は単なる音楽愛好家ではなく、伽藍の再興と森の再生に何らかのかたちで「お役に立ちたい」そんな気持ちで来場した人たちが多かったのではなかろうか。近く写経は1千万巻に達するとか、白鳳伽藍再興の夢は実現に向けて着実に進められている。

山歩 き

(神戸市) 高田 和美

いよいよ本格的な夏がやってきた。夏といえば夏山のシーズンである。夏山のオープンを待ちかねたようにアルプスや富士山などで登山者があふれる。

私たちの年齢になっても本格的な山登りをする人は多い。しかし私はもともと足腰が強くない、加えて年齢とともに弱さは増してきたような気がする。

数年前の夏、発起して九州の屋久島に行ったことがある。その時は足腰の鍛錬のために半年前からスポーツジムで訓練して臨んだ。2泊3日の行程で鹿児島経由屋久島へ、その日のうちに白谷雲水峡へ、映画「もののけ姫」の舞台になったところである。

約半日でその日は終え、翌朝は未だ暗い午前4時半に宿を出発、いよいよ目的の縄文杉のある宮の浦岳へ。荒川登山口から、かつて屋久杉を切り出したトロッコ跡をてくてく歩く。線路跡がなくなったところからいよいよ道は険しくなる。木の根っこをまたぎながら急斜面を登る。途中樹齢1000年を超す屋久杉を見ながらなんとか前へ上に進む。

午前10時半頃、やっと目指す縄文杉に到着。「ああ、これが樹齢7500年といわれる縄文杉か」その時の感激は疲れをも忘れさせてくれる。

それから数年、今年の春に東京の孫たちと奥多摩・御嶽山と三室山にハイキング。標高800m余り、それも途中までケーブルカー、その山歩きで孫たちにおいて行かれるばかり。「もう少し鍛えないと」といわれる始末、わが身の頼りなさを嘆く。

そんなことで、もう一度鍛錬をしようと発起し、手始め（いや足はじめ？）に我が家から見える、高倉、妙法寺近辺から始めることとした。高倉台から梅野、馬の背、妙法寺へと続く通称須磨アルプスといわれる山へ、反対に妙法寺から高倉へと歩くことが多い。高倉の約900段の階段はきつい、いつもハーハー言いながら途中で休まないと言えない。

また妙法寺から高取山、丸山へのコース、高倉から旗振山、鉢伏へのコースなども歩く。こちらは階段はあるもののそれほど急な道でなく歩きやすい。六甲縦走コースだけに多くの人に会う。20や30人ではない、それも我々の年代、それ以上と思われる人々が足も軽々と歩いている。

先日も某知人夫妻と鉢伏山でばったり、向こうの夫婦はリュックに弁当お茶はいうに及ばず、リュックの中に奥さんは5kg、主人は10kgの水を入れている。これはまだ軽いほうですよと言われる。今年は槍ヶ岳へ行く予定と聞く。こちらはペットボトルのお茶とおにぎりだけ、これでフーフー言っている。わが身のふがいなさを嘆くとともに、六甲縦走に参加している人々の脚力と精神力の強さにただただ感嘆するばかり。

でもオゾン一杯の山の空気と、山から見る神戸や瀬戸内の美しい景色を見ながら汗を流す。私にはこれでいいやと満足もしながら、これからも六甲縦走路を少しずつ伸ばしていこうと思っているこの頃である。

日本近代画家の 「絶筆展」を観て

(姫路市) 井上 正敏

人は迫りつつある自分の死期を予知することができるのだろうか。70有余年生かされてきた私は、祖父母をはじめ数多くの親族、そして近郷近在の方々の死を知っているが、死期予知の話を聴いたことがない。

ただ「そういえば、あの時、妙な仕草や話をしていた。あれが虫の知らせということか」という類の話は、故人が黄泉の国に旅立った後になって聞くことがある。従って、人の死は地震と同じく予め感知することは不可能に近いのではないか。

そんな気分で県立美術館の「見果てぬ夢・日本近代画家の絶筆」展を観た。人一倍感受性が強いといわれる芸術家の中でも、色彩感覚に豊む画家が「人生の最終章をどう彩ったか」について、無我の胸中で鑑賞した。この時の流れは、我が人生の中でも最も充実した“至福の一刻”といっても過言ではない。

惜しむらくは、絵画というものについて全くの素人であり、評を加えることはできないが、観たこと感じたことを素直に書いてみたい。

一口に言って、107全ての絵に妖気が漂っているように感じたのは、私の思い過ごしであろうか。

そして、海や川の水を画材にしたものからは水葬を、山や鳥の絵からは鳥葬や風葬が、原野や立木を描いた作品は火葬と土葬を、そして静物の絵からは供花や供物の数々を連想した。

それにしても、この一堂に会した画家の時代は、三途の川の川幅も狭く、姨捨山に登る途もよく整っており登り降りが容易だったが、平均寿命が延びた昨今はそうはいかない。

川を渡るにも水嵩が増し河幅が広がっており、山の方も登る途がなく、原野は荒野と化し索漠している。従って、林住期から遊行期に移行しても、天国や極楽への入口は延々長蛇の列であり、さりとて、よく空いている六道の一つ地獄へは行きたくない。

こんな思考をめぐらしているうち、今回の絶筆展で最初に展示されていた「青木繁画・朝日」に、56番目の「阿部合成画・波と鳥」を重ねた淡い朱色の空間を、天空に向かって自由に飛躍してみたい誘惑に駆られている自分に気付き愕然とした。

同好会だより

□俳句同好会

- ・と き 8月4日(土) 13時～
- ・ところ 県職員会館2階 204号室
- ・兼 題 夕焼・稲妻・銀河・当季雑詠
- ・その他 欠席の方は谷本繁雄までご連絡を。

□ワイン同好会

8月は夏休みといたします。

□男の料理教室同好会

- ・と き 8月11日(土) 13時30分～
- ・ところ 「むぎっこ」TEL 078-333-0628
神戸市中央区下山手通3、シエンビル403号室
- ・会 費 3,000円(当日徴収)
ー7月の教室からー

①砧(きぬた)巻 ②南瓜饅頭の磯辺餡かけ ③みょうが田楽・アスパラ田楽 ④青菜と油揚げの煮浸し
⑤冬瓜とスペアリブの煮込み

□ゴルフ同好会

9月20日(木)、第17回コンペを三木よかわカントリークラブで予定しています。詳細は次号でお知らせします。

□写真同好会 ～8月は例会～

- ・と き 8月18日(土) 13時～
- ・ところ 県職員会館2階 203号室
- ・その他 2L版5点以内持参
9月撮影会の日時・場所等の私案も
お願いします。
- ・前回、7月撮影会は六甲山高山植物園・森林植物園にてあじさい等の撮影の一日でした。

□ハイキング同好会

近代日本経済に多大な影響を与えた近江商人の、白壁と蔵屋敷が美しい五個荘を訪ねます。多数のご参加をお待ちしております。

- ・と き 8月18日(土) 10時45分集合
- ・集合場所 JR能登川駅 改札前
- ・行 程 JR能登川駅→生き生き館→弘誓寺→近江商人屋敷(外村繁邸、中江準五郎邸、外村宇兵衛邸)→大城神社→近江商人博物館→観峰観→近江商人屋敷→藤井彦四郎邸→生き生き館(解散)
- ・交 通 JR明石(新快速)8:49→三宮9:05→芦屋9:14→大阪9:30→能登川10:38

・その他 小雨決行。弁当持参。「青春18切符」が便利です(詳しくは駅でお尋ね下さい)。

□囲碁同好会

6月20日(水)、大会を県職員会館で行いました。結果はつぎのとおり。

《入賞者》

- A組 優勝 名田 重孝(七段)
- 準優勝 北村 文男(五段)
- 第3位 富本 芳彦(四段)
- B組 優勝 梶本 隆(二段)
- 準優勝 北村 勲(二段)
- 第3位 田中 康弘(二段)

□テニス同好会

- ・日時 ①8月23日(木) 13時～17時
- ・場所 神戸ローンテニス倶楽部
Tel:078-221-2383 神戸市中央区宮本通
参加希望の方は阿部昌夫(078-792-0586)まで。

□施設見学同好会

但馬・丹波地域を訪ねます

先月号でご案内いたしております日帰りコースにまだ若干の余裕があります。ご家族、知人の方をお誘いのうえご参加をお待ちしています。

- ・と き 9月27日(木)
- ・集合場所、時間
午前8時30分 出発
「三宮駅観光バスステーション」
TEL 078-222-7755
JR 三宮駅前浜側東へ約5分
(神戸市中央区役所北側)
- ・募集人員 41人 (貸切りバス 1台)
- ・参加費 4,000円(入場料、昼食、飲み物付)
- ・申込期限 9月6日(木)までに同封ハガキで
- ・行 程 ①三宮8:30出発⇒春日 IC⇒県立コウノトリの郷公園(人と自然の共生を考えるエコミュージアムの拠点)⇒出石町(昼食・甚兵衛の手打ち皿そば)後、旧城下町散策⇒丹波竜化石の発掘現場附近(地元ボランティアの人による説明。丹波市篠山川沿い)⇒兵庫陶芸美術館(館内見学と特別展「日本と世界の現代陶芸(仮称)」を鑑賞)⇒三宮駅前18:30頃着

会 員 短 信

□新会員

小林壽一 〒667-1314 TEL0796-94-0747
美方郡香美町村岡区萩山 297-1

勤務先：アサヒコンサルタント(株)豊岡支社
 八木良典 〒670-0986 TEL079-236-6450
 姫路市苜編南 2-6
 勤務先：西播磨県民局龍野分室

原稿募集

思いついたらスグ一筆！

「きずな」は会員の気のおけないおしゃべりと情報交換の部屋です。だれでも、いつでも大歓迎です。

随想、旅行記、研究発表など内容は自由。近辺のご当地情報も喜ばれます。関係の写真も結構です。どうぞお気軽にお寄せください。

原稿用紙2枚(800字)程度。締切りは毎月15日までに事務局へ。Eメールも歓迎、1行23字詰めならびったりです。

(事務局)



井戸知事さんの「街頭トーク」

次回は8月24日(金)

朝、JR川西池田駅前！

7月10日(火)午前7時35分より、明石駅前約30分間県内情勢について県民に語りかけました。次回は8月24日(金)午前7時45分からJR川西池田駅前実施予定です。ご参集の方は事前に予定変更の有無を事務局までお問い合わせください。

第一四一回 颯句会(平成十九年七月七日、十二名、六十句)

(兼題) 喜雨、毛虫、胡瓜、当季雑詠
 選者 盛岡翠月

天賞

七月の朔日餅を食べにけり

西條秋泉

(評) 年の終りを年越しといい、上半年の晦日六月三十日を「名越し」という。この日半年の平安に感謝し、茅の輪をくぐって身を浄める「夏越しのお祓い」がある。翌日お供えの餅をいただくのが「七月の朔日餅」で今後半年の息災を祈る行事である。掲句はぜい肉もすて一見ぶつきらぼうな表現に見えるがさに非ず、先ずは健康への感謝と祈り裏にはお祓いの神事、境内の出店や祭のざわめき…等人々のくらしまでがかくされている。表現簡なるが故によけいに読むものをひきつけ「心の奥の目」を感じさせる。伊勢詣ででの詠ときく。

胡の国の露地にありしか花胡瓜

兼古翠耕

(評) 戦後日本の食は胃袋時代から変化しながら今や「目で食べる」時代だという。今食膳に添えられた花胡瓜を目のあたりにしての一句。確かに美しい、だが花芽の幼い命を摘みとってしまった…あわれや、原産地では自然のままに大きくなる迄育っていたものを日本では燃料をたいてハウスでと、慈悲の向うの日本食へ警鐘をならす。冷徹な目で見ながらものあわれを感じさせる心は温かい。因みに「胡」のつく胡麻、胡瓜…などは中東あたりから日本に入ったものだとか。

地賞

褒貶は人の世のこと仏法僧

森仙游

風倒の大樹が吐ける毛虫かな

中森眞木

含羞という言葉あり梅雨の月

野田おさむ

人賞

葛餅を並べ茶店の深庇

佐藤げんたろう

少年の渴きに喜雨やハイネの詩

本下汀藻

味噌もよし胡瓜噛む音の醍醐かな

安平純月

生も死も毛虫焼く火の棚田辺

打越碧山

夜叉となり佛となりて毛虫焼く

谷本関山

川床涼み右手に京をいでにけり

赤木しげみち

父の日に娘がくれし甚平着る

外山公望